

新川達郎教授最終講義録

2021年2月20日（土）16:00～18:15

最終講義録

市民社会のソーシャル・イノベーション ～市民、市民参加、市民活動、市民社会の未来～

新川達郎

「今里滋先生・新川達郎先生ご退職記念講演会(2021年2月20日)」の講演から

はじめに：なぜ行政研究からソーシャル・イノベーションだったのか

今日、私は、今里先生の講演のように楽しく自分の人生を語るということが出来ない性格なので、真面目に講演会をしようと思っております。やはりソーシャル・イノベーションコースを、私も合わせて卒業させていただくということで、改めてソーシャル・イノベーション(以下、SI)ということを考えてみたいということで今日はお話をさせていただきたいと思います。多少、市民とか市民参加、あるいは市民活動と言ったようなことに、これは今里先生との接点もずっと昔からたくさんあったところなのですけれども、そういったところへのこだわりもありますので、このあたりも少し踏まえながらお話が出来ればと思っております。

どうしてこういうソーシャル・イノベーション研究(以下、SI研究)に向き合うことになったのかという、私なりの履歴のようなことを少し最初にお話をしておきたいと思います。勿論、何よりも今里先生との出会いというのが最大のポイントということとは間違いないのですけれども、私自身はずっと東京で学部・大学院時代を過ごしておりました。1970年代くらいまで、丁度、大学院くらいの頃までは、政治や行政制度、これは今里先生と重なるのですけれども、こういう制度研究やその政策決定の研究などを主にやってきていました。そんな中でも、地方自治制度あるいはそこでの制度設計の議論であるとかというのが、主な研究関心ではありました。今も細々ですが、こういう政策研究や行政研究をやめているわけではないということでもあります。

その後、東北学院大学それから東北大学に移って教育研究生活をしていました。80年代から90年代がそうなのですが、その間に教えた科目が地方自治や行政学というようなことも多かったのですが、いずれも民主主義の政治やその政府制度にも関わりがあり、その中で実は、市民というところにももっと目を向けないといけないなというふうに思い始めたということがありました。市民参加研究やそれを演習や講義の中で、また自分自身の研究の中でも進めていくということがその当時から随分と大きなウエイトを持ち始めました。同時にそれはただ単に選挙に行くとかというような市民参加ではなくて、様々な市民運動・市民活動というものに関わったり、そういう人達とのお付き合いがどんどん増えていったということが、80年代後半から90年代にかけて随分増えました。いまだに東北でのそういう活動というのを続けていて、東北の特に仙台、宮城にありますいくつかのNPOは、相変わらず私も代表をやったりするという何をやってるんだかよくわからないところがあるのですが、まあとにかくそんないろんな市民活動団体に関わったり注目をしたり、その調査研究というのをやってきたり、ということがありました。

そんな中で、90年代は阪神・淡路大震災があるなどやはり大きく日本社会が動いた時期であり、「失われた何十年」とかという話もありますけれど、もう一方では市民レベルで見るとやはりこの90年代以降、日本の政治や経済そして社会の構図というのが市民社会中心へと大きく変わった時代ではないかというふうに思っています。そんな中で、NPO・NGO・ボランティア研究というようなことにも幅広く関わらざるを得なくなってきたということがありました。その頃にこうした市民行政関係であるとか、協働であるとか、ガバナンスであるとかこういうことの研究というのを始めることになりましたし、それが今日の教育研究の端緒になってきているということがあります。その中でもNPO研究あるいはガバナンス研究というのが現在でも私自身の大きなテーマになっています。

そして2000年代に入って、21世紀に私自身にとっての大きな変化というのが、実は今里先生に同志社においていただいたことです。最初は軽い気持ちでということと問題がありそうなのですが、選挙に出られるということを知って、頑張ってもらわねばと思って応援もしていたのですが、当時国立大学は選挙に出ると大学を辞めないといけないというのがあって、「ちょうどいいわい」と思って真山先生と相談をしたら「じゃ声かけてみましょうか」と気軽に声をかけてしまいました。すみません(笑)。今里先生からは感謝の言葉をいただきましたが、本当にそう言っていただくとありがたいのですが、こちらは「ひょっとしたら来てくれるかな？」とか言いながら言ってみただけなのですが、ありがとうございました。兎も角その後おいでいただいて、本当にタイミングよくちょうど私自身が研究科長で割と動きやすかったというのもあって、このSIというのをご提案をいただき、そして研究科・大学をあげてこれを進めていこうということで今日に至っているということがあります。これまでの研究とそして今里先生との出会いがあって、そういう意味でのSI研究への、そしてそれに関わる実践への目覚めというのがあったというふうにご理解いただけるとありがたいところです。

1 なぜSIなのか

今日は、市民社会のSIという大きなテーマをあげさせていただいていました。お話をしたいのは、どうしてこのSIのようなことを、改めてこの20年近くやってきたのかということをお話したいということ、そしてその中で、市民とか市民の社会というのをどんなふうに考えていったら良いのかということ、是非最後に自分なりに整理をしたところについてお話したいと思っています。

特に長く市民参加ということに関わって、文章では書くことも多かったのですが、改めてこのSIとの関わりというのを考えてみたいというふうに思っていますし、そもそも市民が作っているこの市民社会というのを、SIからするとどんなふうに捉え直すことが出来るのか、こんなことも少し辛気臭い話になるかも知れませんが、やや暗い話になるかも知れませんがお話をしてみたいと思いました。

SI自体が何を指すのかというのはもちろん本当に今里先生がよく分かりやすく的確におっしゃる通り、世直し・人助けというその通りなのですが、私自身は、やはり一人一人の市民が本当にこの社会の中でど真ん中に居て、そしてみんなで支え合っているようなそんなイメージが、我々の社会かなと思っておりまして、そういう社会やその市民の為のSIでなければ意味がないだろうなとも思っています。ある意味では、様々な世の中の仕組みというのが、全てこの一人一人の市民のために働いていく、そんな社会をどうやっていくかというところが、SIの最後の行き着いた先のかなと思ってます。そういう市民の為の社会への問い直しや作り直しというのが、SIの究極の役割ではないかと考えていますし、そこから出発をし直すというのが、いつも心がけていかないといけないことか

もしれないなどというふうに思っています。

そういうSIが、何故今、我々の社会の中で求められているのかということでもあります。残念ながら、私達が今生きているこの社会、本当に生きづらいそういうところが沢山誰にでもあります。しかも、一人一人のそれぞれの生き方が違って、それぞれの個性が違って、ということに応じて実はそれぞれの生きづらさやそれぞれの困りごとというのがそれぞれに違いながらあって、それぞれに悩んでいます。そういう時にこれをどんなふうにして解決しより良く変えていくことが出来るのだろうか、そのためには市民とその社会というのは、もっともっと丁寧に一つ一つの問題を、隅を照らすように考えていかないといけないということが大きいのではないか、そんなふうにも思っています。そういう場面のSIを実現しようとすると、やっぱりいろんな人達がいろんな形で、中には重なっているように見えるかもしれませんが、実は様々な角度からそして様々な活動領域から、そしていろんな力のかけ方で働きかけていかないと解決の糸口を探ることもできないのです。やはりそうしないと市民による市民のための市民自身の中に生まれる社会、そういうものにはなっていないですし、そういうことのために社会を組み替えていくのが、SIの役割なのかなというふうに思っています。そういうSIが作っていかねばならない市民の社会というのが、一体どういうものなのかということについて、次にお話しします。

2 SIを必要とする市民とその社会を考える

ここは少し歴史的思想的に古い話になりますけれども、私達が基本的に今拠って立っているのが元々の近代市民社会、これがベースになっています。もちろん大きく変質はしていますけれども、それこそアダム・スミス流に言えば、王様の権力に対するブルジョア市民の権力であったり、あるいは教会の権威に対する世俗の権力であったり、こういったものが市民というものの本来のあり方とされてきました。まあ言ってみれば様々なくびきとか、いろんな拘束から自由であるというそういう市民のあり方というのを考えていくというのが基本だったのだらうと思います。いろんな生きづらさが歴史的にありますけれど、それを乗り越えるために市民の社会というのが出来てきた、そんなふうにも考えてもいいのではないかと思っています。そういう自由な市民として私達が作ってきたのが、本来の市民の社会、市民社会であるはずであります。

そもそもなぜこんなものを作ってきたのか。それはやはり自分達が生きやすいために作ってきたそんなふうにも考えてもいいのではないかと思っています。そういう基本的な市民の作る社会での市民の主張というのが、言わば参加であったりあるいは権利の保障であったり、あるいはサービスの享受であったりということでもあります。但し、そういう社会を作る以上は、それに対する一定の責務とか義務は発生するということになります。どういう義務があるかというのは、歴史的にはどんどん変わっていくのですが、例えば古典的なそれこそ都市国家の場合に、民主制の都市国家のようなケースで言えばまさにその都市を守る、つまりは自分たちの市民社会を防衛するための言わば市民軍を作り、それに参加をするということが市民的義務だったりするようなこともあります。今でいうと納税の義務とかということになるのでしょうか。まあともかく、市民の社会というのを私達は自分達自身のために本当は作ってきたはずであります。

ところがそうやって一旦出来上がった社会において、市民が本当にその社会の中で幸せなのか疑問があるという、こういった問題があります。言ってみれば自分達が、よりよく暮らしていくために市

民社会をつくってきたはずなのです。そしてそれ自体がSIだったはずなのですが、残念ながらそうやって出来た私達の今の暮らし方を振り返ってみますと、本当に暮らしにくい社会が、逆に出来てしまっているということが沢山あります。本当は暮らしにくい社会から脱却するために運動をし、そしてイノベーションを繰り返してきたはずだったのですが、残念ながらそこで出来上がった社会というのが必ずしもそうはならなかったということでもあります。もちろん元々は、まさに市民の自由とそして市民の意思というのが、尊重される社会をつくろうということで近代市民社会が出来ました。そこでは、自由市場とそして共和政体でもってこうした市民社会というのが成り立っていくという自由主義と民主主義の原理が実現され、これまさに革命でありますしイノベーションだったのです。けれど、もう一方ではそうした一旦出来上がった社会自体はその後の発展の中で大きくその性質を変えていくということになります。

例えばよく言われるのが、市民社会から大衆社会への変化の中で、実は市民権を保障するというこの中に、社会権の保障やあるいはそれを越えた様々な福祉国家の介入が始まっていくということがあります。それが進んでいく時に、実は私達は改めて不自由な社会に直面をするということになりますし、それを乗り越えようとするとは今度は市場第一主義的な新自由主義のような議論に逆に取り込まれていくというようなことがあります。これもまた、多くの市民にとっての本来の自由というのを奪ってしまうというそういう問題を沢山生み出していくということになります。いろんなイノベーションが、同時に私達自身の本来のイノベーションの必要性というのを引き起こしていくという、そういう時代にこの数十年の間私達は生きていかなければならない、そういう状況にあるのだということでもあります。改めてその中で私達が考えなければいけないのは、やはり市民自身のありようというのをきちんと考えていく、丁寧に考えていくということではないかと思っています。

3 SIを担う市民とはなにものであるのか

歴史的には、市民の姿にも勿論いろんな姿があります。近代市民社会では、自立的な市民像というのがその基本になっていました。自立をするというのは、要するに経済的に食べられるようになっていくということと、他の人に口を差し挟まれぬ、自分で自分のことをやっていくということと基本的には理解をしていただければいいと思います。16世紀から17世紀にかけての自立的な市民像の基本というのは、自分の土地で生産をしてそれで食べていく自営の自立農業者であったり、あるいは都市で商工部門で富を蓄積し、地位を確立したそういう商工層であったりと、それらの自画像というのがその市民なのです。そういう市民像をつくるということ自体、あるいはそういう市民になっていくということ自体ある種の市民のイノベーションだったのだらうと思っています。

こう言うと市民になるイノベーションが農地や市場経済的富だけを条件にしているように聞こえるのですが、同時にそれだけではなくて、じゃあ土地を持たない人はイノベーション出来ないのか、あるいは徒弟奉公している人達はイノベーション出来ないのかという疑問がわいてきますし、そんなことはないでしょうというのが直感的な答えだらうと思っています。そうした人達にもまた市民としての自らのイノベーションというのを考え、それを起こすということが出来るはずだということになります。ある意味では、今日私達が直面をしている市民のあり方というのは、こうした市民の本来的なSIに向けてのそれぞれの探求というのを今日的に改めて表現し直しているというところに、このSIの意味というのがあったのではないかというふうに思っています。言わば市民自身が、常に自分自身にとっ

ての新たなミッションを自分自身で発見をしていく、そういうプロセスとして市民のSIというのがあるかもしれないというふうに考えていただくというのではないかと考えています。

T.H. マーシャルの市民論との関連で言えば、元々は自由市民と言われていた言わば自分の全財産を自分の勝手に出来るという市民は、西欧の18世紀的なマーケット的な市民です。そういう元来は消極的な自由市民がその自由を守るために、政治的な参加の自由というのを獲得していくのが19世紀的な政治的な市民であり、積極的な自由を要求するわけであります。ところが工業化と資本主義の発展及びその矛盾によって、政治的権利を行使する市民だけではすべての市民の自由を守れなくて、むしろそうした市民が、平等にその社会の中で生きていくということを保障されなければならない状況に追いやられたのです。社会的市民というふうに呼んでいます、20世紀的な市民像として社会保障をしていくというところまで考えなければならないというのです。マーシャルは、この人自身は1960年代でお亡くなりになっているので、その後の展開はないのですけれどもこういう議論をされました。しかし、恐らくその後の市民参加や市民活動を考えると、改めてこうした市民に歴史的思想的に共通するもう一つ重要な特徴は、この市民が、自分自身が自分達の生き方というのを考え決めていくというそういう自主的な市民像だったのではないかと、いうふうに勝手に付け加えて議論をしています。言ってみれば自主的市民像の時代における市民のSIというのは、そうした一人一人が自分自身の有りようというのを組み替えていく、そしてそのこと自体を自分自身のミッションにしていく、そういうところにSIの意味や価値があったのではないかとということでもあります。

4 SIによって市民がつくる社会とは何であるのか

そういう市民が作る社会に、新しい意味というのを恐らくもたらしてきているのがSIだというふうに言い切っても良いのではないかと考えています。もちろん20世紀社会というのは、18世紀以来の市民が中心になる社会を作ろうという数百年の努力の結果であり、若干西洋的なあるいは北米的な思想的な偏りがあるので、これが良いかどうか議論はあります。けれども、少なくとも20世紀の到達点として政治的には民主主義、そしてマーケット的には自由資本主義、そして社会的には市民社会の成立ということがこの21世紀までの到達点というふうに仮に考えることが出来るとすれば、実は、このそれぞれのセクター自身が、市民によるSIの成果でもあったと考えていただいても良いのではないかと考えています。

市民社会の部門というのも市民を支えていると考えていただければ一番わかりやすいのですけれども、市民社会セクターというふうに呼ばれている分野では、様々な市民団体が市民自身のために働いているということがあります。その中でそれぞれの市民活動団体自身が自らの活動を自ら組み立て直していく、そのことの中にSIの要素というのを私達は読み取ることが出来ると思います。いわゆるNPOやNGOあるいはボランティアの活動というのが、こうした市民社会セクターを構成する基本になりますけれども、そうした活動が生まれてくるのもまさにSIそのものでもあります。

もちろん他のセクターがこうしたSIと無関係かということそんなことはありません。言ってみれば、元々の市民社会という言い方自体が、17世紀、18世紀的に言えば、一つは政治社会と同じ意味でジョン・ロック的には使われてきていたということがありますし、同時に自由市場、マーケット等と同じ意味でアダム・スミス的には使われてきた市民社会という言葉があるということでもあります。実は市民社会そのものが、自分自身を組み替えてきた歴史というのがありますし、それを組み替える一つ

一つの営みというのがSIだったのではないかというふうにも考えています。少し市民社会全体をどんなふうを考え直していくのかという時に、こうしたやや長い歴史的なスパンの中でのイノベーションの結果・成果として私達の今というのを考えていく、翻ってそれを受けて今私達がどういったSIを考えていけないといけないのか、それを完成させるということがひょっとすると私達の使命なのかもしれないと思いながらこういう議論をさせていただいているところでもあります。

5 SIのために市民参加をするとは、どう行動すれば良いということなのか

そういう新しい市民社会を作る・支えるそういう市民の役割というのを、改めてSIとして考えてみた時に私達はどういうふうに行動していったら良いのかということが次のテーマであります。古典的には、先ほど申し上げました市民の役割というのは、兵役であったりあるいは納税であったりするというところでもあります。マキャベリ的に言うと、市民軍というのが一番強力な軍隊だったそうでもありますけれども、それは兎も角といたしまして、米国のようにボランティア・志願兵の制度つまり志願徴兵制ですが、これがきちんと残っているそういう国もあるということでもあります。おそらく最強の軍隊というのは、こういうところにあるのかもしれないということかもしれません。

それは兎も角といたしまして、こういう市民社会の発展の中で新しい市民的な権利や義務というのが生まれつつあります。そしてそれ自体が、SIではないかと思っております。それはボランティアであったり社会活動であったり、そしてそれに向かう市民自身が従来型の市民の権利・義務ということを乗り越えて自己改革をしていっている、そういうところにこのSIの意味があるのではないかというふうに思っています。先ほど自主的市民という言い方をしましたけれども、まさに自主的に社会との関わり方を組み替えていくというようなそういう市民の姿というのが、このSIの重要な特徴でもあるというふうに今考えています。20世紀的には、やはり政治参加やあるいはマーケットへの参加、そして場合によってはなにがしかの社会貢献活動というのが市民的な義務だったのかもしれませんが、21世紀的にはそうした市民のあり方自身を自らが組み替え、そして社会を変えていくということが出来るかということが改めて市民に問われていますし、そういう市民の姿こそが実は、新しい市民社会を作っていくことになると思います。そういう意味では、市民が社会に関わるということ自体一言で市民参加というふうに言ってしまうれば簡単なのですが、その関わる関わり方そのものを考え直していけないといけないとも思っています。

6 参加と民主主義のSIを考える

そういう市民参加ということ自体も従いまして実はSIなのですが、ただ単に選挙に行くというのは、もはやSIからするとその役割は極めて小さいというふうに言っているのかもしれませんが。むしろ市民参加自体を変えていく、そしてそのことを通じて市民社会を作っていくあるいは作り直していく、そういう役割というのが市民の参加の役割としてありますし、そのこと自体がSIではないかというふうに思っています。今里先生が選挙に出てやろうとお考えになって実践してこられたというのでも、たぶんこうした市民の本来の権利と義務を乗り越えて、そして社会を変革するということに発する考え方だったのではないかと考えています。言わばこうした社会を動かすメカニズムに関与をするという意味での市民参加、そういうSIというのも本当は考えていかなければいけないですし、そういう市民社会運動というのを私達はSIとして位置付けて行かなければならないのではない

でしょうか。

それはただ単に困りごとをその困りごとの範囲内で解決をすることではないはずです。勿論、これ自体はとても大事ですけれど同時にそのことをむしろ社会全体の課題として、そしてそれを捉え直して、その問題解決を通じて社会そのものを組み替えていくようなそういうSIが今求められているのではないかと。もちろん一人では単独では出来ないということが沢山あります。その点ではいろんなネットワークやいろんなパートナーシップを作っていくということも合わせて、このイノベーションの重要な条件ということになるといふふうに考えています。

こういう市民参加ということ、SIを通じて私達はこれまで本当に大きく発展をさせてきたというところがあるのではないかと考えています。もちろん古典的な政治参加の権利というのを拡張するというのもイノベーション、イノベティブな活動であったということは間違いのないと思いますし、代議制民主主義の制度上の仕組み自体もある意味では、それが始まった頃にはきっとイノベティブな活動だったのだらうと思っています。しかしながらそれらが社会制度として定着をし、そのこと自体の元々持っていた意味というのが意識から薄れて行った時に、実はこれらの制度がむしろ機能不全に陥りますし、それを乗り越えなければならないイノベーションというのを考えていかななくてはならない。そしてそれは、実際には一人一人の市民がその問題に気づき、そしてそれに取り組んでいくということが重要な条件になっていくということでもあります。

その点では市民運動というのは、常にSIだったと思っていますしそういう運動がなければ実は、政治も経済も社会もここまで動いていくということはなかったと思っています。その動き方が良かったかどうかというのは、議論としてはありますけれど、同時にそうした運動をせざるを得なかったということ、その動きを自らやらざるを得ないという切羽詰まった思いを多くの人達が持ってきたということも事実として重要ではないかと考えています。ある意味では単なる参加、形式的な関わりではなくてむしろ自分自身の人格をかけて関わっていくということがなければ、本当の変革にはなりません。それは自分自身の変革でもありますし、同時に周りの人々など周囲の変革でもありますし、そしてそれは最終的には社会制度全体の変革にも繋がるわけですが、そういう市民参加というのを本当は考えていかなければならないのです。それこそが、SIだということができるだらうと思っています。

1960年代というのをよく参加革命の時代というふうに言っています。様々な参加運動というのが生まれ、米国の公民権運動や、あるいは西ヨーロッパそして日本でもそうですが、労働運動・学生運動を通じて世の中の動き方というのが大きく変わったというふうに言われています。ある意味では、これも大きなSIだったのではないかと考えています。そしてその中で良かったか悪かったかの議論はありますけれども、ただ単なる反対や異議申し立てでは世の中動いてはいかないということ、そしてその中で様々な新たな手法というのがイノベティブに展開をされていくということが、いろんなところから生まれ始めていたということがあります。ある意味では制度化をされ、そしてその中に取り込まれるというところも市民参加の一面としてあったのですけれど、同時にその中から新しい活性化のようなものへのSIも生まれ始めているということもあるのではないかと考えています。

そういう点では、市民参加によるSIというのが80年代の終わりぐらいに随分議論になりましたけれども、いわゆるDeliberative Democracy(熟慮の民主主義)ということと非常に親和性が高いのではないかと考えています。熟慮あるいは討議による民主主義というのを再生しようという運動、この20年ぐらいそれなりに注目はされてきているわけではあります。こういう様々な民主主義の制度の

機能不全、欠陥というのを乗り越える動きというのがこの数十年各地で続いています。そのこと自体がまさにSIだったのだろうと思っています。従来型の討論・議論というのは実は議会制民主主義で最も重要視をされていたわけですしそのはずだったのです。けれども、実はそれ自体が適切に機能しなかったという時にそれをどういうふう乗り越えていくのか、市民的な熟慮というのをどういうふう再設計をしていくのか、まさにSIというのがそこで進んできていたのではないかとそんなふうにも思っています。ある意味では民主主義についてより機能的に適切に働かせるような、言ってみれば選挙や議会に取って代わるまでいかどうか分かりませんがその機能を補完するような手法というのが、SIを通じて実は実現をされてきているということがあるのではないかと考えています。そのための様々な参加手法というのがありますが、もう時間も時間なのでこのあたりはまた何かご質問でもあればお答えしようと思っています。

7 SIと市民社会のかかわりを日常の中から組み立て直す

いずれに致しましてもSIというのは、ここまでお話をしたように市民と市民社会がどんなふうに出発点から上がっていくのか、市民が社会をどういうふうにしていくのかというその作り込み方の中で、実は市民自身もイノベティブにそしてその活動もイノベティブに、結果として出来上がっていく社会自身もSIを通じたものとして出来上がっていくというところに、「ソーシャル・イノベーションの意味」というのがあるのではないかと考えています。そのことは、別に一人一人の暮らしの問題と切り離されたところでSIがあるという議論ではなくて、むしろ逆に日々の暮らしの中にイノベーションがあるからこそ、それがいわば市民のあり方や社会のあり方というのを組み替えていくことに繋がっていくと、そんなふうと考えていただいたほうが良いのではないかと考えています。

身近な問題そしてそれぞれの地域が直面をしている様々な課題、そういうところにSIというのが実は最もよく働いています。もしそれがなければ、その地域社会そのものが失速をしてそして閉ざされた社会として閉鎖的にその生命を終えていくという、まあ言ってみればマイナスの循環を繰り返し縮小再生産をして消滅してしまうということになっていくのではないかと思います。それをどう乗り越えていくのかというのは、まさに一人一人がどう生きていくのか、そしてその生き方というものがある社会をどう変えていくのかというそういうSIと大きく関わっていくことになるかと思っています。

伝統的に道普請とか川普請という言い方があります。地域社会が必要とする公共財を、地域自身が造っていくというそういう活動も多くの伝統的な社会にはあります。これらは数百年、数千年の間に作り上げられてきたそういう仕組みであります。日本の場合にはそれを道普請・川普請というような言い方で典型的に表現することが出来るかと思いますが、そういうことが出来るということ自体がSIでしたし、そういう活動に関わるという一人一人の住民というのがSIでしたし、それが出来る地域社会をつくるということ自体がまさに市民社会的なSIだったのではないかと、そんなふうにも思っています。

8 これからのSIと市民社会のあり方に向けて

これからの市民活動、市民社会とSIについては、本当に様々な観点からSIの重要性ということを変えて考えていかなければならないのです。その時の視点として、少なくとも一人一人の市民やそしてその市民の社会というのがより良く持続可能になっていくためには、市民がつくる社会そしてその

組織がこうしたSIを通じてそのミッションをよりよく実現していくことが求められていると、考えることができます。そういう社会こそがこれからの市民社会ですし、そこにおけるSIの役割ではないかと思っています。

SIを通じて市民と市民社会組織は、恐らく自らの目標というのを改めて立て直していくということが出来るはずで、SIを意識することで一つ一つの市民の活動や市民社会組織の活動、そしてそれらで作るそれぞれのセクターの活動というのが改めて組み立て直され、場合によってはその活動を活性化させることになっていくのではないかと思っています。

こうした様々な市民の活動の広がりをどう組み立てそして時には立て直していくのかという場合に、まさにSIの大きな役割というのを見いだせるのではないかと思っています。SI自身が、実は市民自身を変えていっているということ、そして我々の社会そのものを変えていっているというそういう構図をもう一度考えておく必要があるのではないかと、我々がSIをするのではなくて私達自身がSIを通じて変わっていく、そして変わっていく私達自身が社会そのものに働きかけ、それを変えていく、その担い手になっていく、そういう市民社会の展望というのを持たなければならないのではないかと、いうふうにも思っています。

そうしたSIがもたらす市民的な意義というのは、まさに市民とその社会の共通の目的あるいは基本的な価値観の共有をすること、このイノベーションを通じて出来るかどうか、そういうツールとして使うことが出来るかということが基本的には問われようかと思っています。そして、様々な市民の声を組織の声にしていくようなそういう連携・連帯のツールとして、SIというのが役に立てるといって状況を作ることが出来るかどうか。更にはそれぞれの思いを、一人一人の思いを、大切に生きることが出来るというような、そういう共通の基準としてこのSIということをして位置付けていくことができるかどうか。また更にはマーケットやあるいは公共部門との連携を通じて問題解決をしていくというツールとしてSIというのを共有化できるかどうか。言わば私達がそういう本当に必要な声というのを声にしていくことが出来るかどうか、そしてそれを実現することもSIの大きな役割ではないか、そんなふうにも思っています。

本当にこれからの市民と市民社会、その活動に大きな変革が求められているのですが、その展望というのをSIがもたらしてくれるのではないかというそんな期待を込めて最後にお話をさせていただきました。

ご清聴に感謝いたします。ありがとうございました。

講演資料

『市民社会のソーシャル・イノベーション～市民、市民参加、市民活動、市民社会の未来』

—「退職記念講演会」2021年2月20日—

新川達郎(同志社大学大学院総合政策科学研究科ソーシャル・イノベーションコース)

はじめに：なぜソーシャル・イノベーション研究に向きあうことになったのか；私の履歴

1970年代は政治行政制度とその政策決定の研究：地方自治制度、都市自治制度、市政研究からの出発(今も細々政策研究、行政研究)

1980年代、自治研究や行政研究は民主主義政治とその制度の研究として：市民とその参加から（市民参加研究は今も細々）

市民参加研究は市民の自主的活動との相補関係の研究を要請：市民活動（住民活動）団体への着目、現地調査の経験から

1990年代、NPO・NGO、ボランティアの実践と研究の展開：市民と行政の関係、協働ガバナンス研究の端緒（その後はNPO研究も細々）

2000年代、今里先生を通じてソーシャル・イノベーションと正面から向き合うことに：「社会革新」の研究と実践への目覚め（ガバナンス研究、ソーシャル・イノベーション研究）

講演のアウトライン

- 1 なぜソーシャル・イノベーション（SI）なのか
- 2 SIを必要とする市民とその社会を考える
- 3 SIを担う市民とはなにものであるのか
- 4 SIによって市民がつくる社会とは何であるのか
- 5 SIのために市民参加をするとはどういうことなのか
- 6 市民がつくる社会とSIとの関係はどうなっているのか
- 7 SIは、今、どのように市民社会を作り替えようとしているのか、
- 8 市民社会はどのようにSIを実現しようとしているのか

1 なぜソーシャル・イノベーション（SI）なのか

1-1 SIは何を目指すのか

一人一人の市民が中心にいられる社会のために
社会、経済、政治、行政もすべてが市民のために働くには
市民のための社会になっているか、常に問い直し、作り直していくことが必要ではないか
市民のための社会への問い直しと作り直しが、SIの役割ではないだろうか
改めて市民の社会を考え、そこから出直す必要があるのではないだろうか

1-2 なぜSIが、市民社会に求められているのか？

一人一人の生の問題は市民がつくる社会（市民社会）の中で生まれる：市民の生活問題の解決に向けてのSIの役割

社会を変える「変革、刷新」により良い方向を目指す「実践」：「分析提案」から「実験」、「実施」、「実現」、「普及」へ

SIの担い手も市民とその社会である：公共部門（行政、公共的団体）は市民社会であり、民間非営利部門（ボランティア、NGO、NPO）も市民社会、市場部門（社会起業家）も企業市民社会

市民による、市民のための、市民自身の中に生まれる社会変革が探求されているのがSI

2 SIを必要とする市民とその社会を考える

2-1 市民社会とは

近代市民社会：王権や宗教権力に対抗する近代市民社会、ブルジョワ市民がつくる市民社会、世俗の権力としての市民社会

現代市民社会：大衆社会

市民社会の構成員としての市民：市民がつくる社会

そもそもなぜ市民社会をつくるのか：それは市民的権利を実現するため、その主張とは：財産権保障、政治参加、保護、サービスの享受

つくる以上は市民的義務が発生：市民の責務、責任の履行；社会の防衛、納税、公共奉仕

2-2 市民社会のソーシャル・イノベーションとは

市民社会をつくることが人々のソーシャル・イノベーション

人が暮らしにくい社会（封建社会、階級社会）から脱却：社会運動や革命、

近代市民社会の形成：市民革命とその担い手たちによる自由市場と共和政体（市民社会＝政治社会）の成立

国家と社会の2元論を市民が克服：ヘーゲル的世界観では無秩序で混沌とした市民社会による支配

市民の権力拡大と市民の変質、大衆へ：市民社会から大衆社会へ、そして市民権を保障する自由主義国家から社会権を保障する福祉国家へのソーシャル・イノベーション

福祉国家の限界から新自由主義へ：市場のイノベーションへ、社会性の放棄？

3 SIを担う市民とはなにものであるのか

3-1 市民とは何者か、市民のソーシャル・イノベーションとは

市民の姿：歴史的な変化は市民自身のSI実現の姿

自立的市民像の形成：自営農業者、商工層の自画像の作り直しとしてのSI

小作と労働者：市民化、市民的権利の主張もまたSI

今日の市民活動やボランティア：市民自身の新たなミッションの発見というSI

3-2 T.H. マーシャルの市民論とソーシャル・イノベーションへの発展

Thomas Humphry Marshall 1983-1961

自由市民：束縛からの自由、財産の自由、18世紀的で自由市場社会に対応（権威主義からの自由）

政治的市民：自由を保障するための政治的権利の要求、19世紀的で民主主義政治体制（政治社会＝市民社会）に対応

社会的市民：自由だけではなく社会的な存在の保障へ、20世紀的福祉国家的権利保障へ社会民主主義体制

自治的市民へ（新川）：自分自身で問題解決を探求する市民のSIへ、21世紀的市民活動のSI、そして新しい市民社会へのSI

4 SIによって市民がつくる社会とは何であるのか

4-1 市民社会の新たな意味をもたらすソーシャル・イノベーション

20世紀の到達点：社会を構成する三つのセクターの成立と固定化：政府セクター、民間営利セクター、市民社会セクターの各々に必要なSI

市民社会セクターを構成するアクター自身と活動のSI：市民社会組織（CSO）、NPO、NGOの叢生

と活動の活発化

市民社会の組織の機能分化へ：多様な活動への SI

市民が市民を支えるための SI への注目

市民社会が市民を支えるための SI へ：新しい市民社会を SI 的に完成させる必要がある？

4-2 新しい市民社会を支える市民の役割とそのソーシャル・イノベーション

市民の古典的義務：兵役、納税 * 市民軍、志願兵 (Volunteer)

市民社会発展期における新たな市民的権利と義務の SI：ボランティア活動、社会（参加）活動の SI と担い手である市民自身の SI

自治的に社会参加する市民：市民参加（20 世紀的政治参加）型市民から社会参加型市民への SI

政治参加から社会参加へ：市民活動それ自体の対象や方法の SI

市民参加の SI 型意味転換へ

5 SI のために市民参加をするとはどういうことなのか：参加と民主主義の SI を考える

5-1 市民参加とソーシャル・イノベーション

市民参加は SI、市民参加による SI、市民参加を変える SI

市民社会を自ら作りあげる市民：市民社会への参加が SI

市民の本来の権利と義務を考える：参加の権利と義務を組み替える、拡張する SI

社会を動かすメカニズムに「関与」する SI：

市民参加の行動が市民社会運動でもある：行動に内在する SI

市民参加とパートナーシップの SI：参加から始まる協働

5-2 市民参加の発展を生み出した SI

市民参加の発展：市民としての SI、市民社会をつくる SI

政治参加の権利への SI、法的保障への SI：

代議制民主主義における参政権の平等：参加が当たり前になるための SI

代議制の機能不全、代議制政府（行政）の機能不全を変革する SI

市民運動の展開は SI：抵抗運動、対抗運動の活発化

参加革命；異議申し立てから代替案の提示へ、SI の展開

市民参加の制度化の時代から、再活性化への SI

5-3 熟慮の民主主義と市民参加のソーシャル・イノベーション

熟慮と討議による民主主義の再生、民主主義の SI へ

議会、選挙、政党、利益団体、政治運動における熟慮の限界を乗り越える SI

市民的熟慮の再設計：本来のタウンミーティングと討議の可能性の拡大

代替手法の SI 型開発へ：深刻な価値対立や膠着状況を打破する政策決定への SI

大規模審判、市民陪審、計画細胞、討論型世論調査、無作為抽出型市民会議へ

6 市民がつくる社会と SI との関係はどうなっているのか

6-1 市民が地域課題と向き合うソーシャル・イノベーション

特定の地域、身近で課題となっている困りごと

地域に根ざした活動への期待：従来型自治的地縁的組織の活動とそれへの期待、地域地区制度や地域自治組織の活躍というSI

地域の役割分担の組み替えにおけるSI：地域サービスを地域の担い手へ、

地域の活動が直面する共通課題を解決するSI：活動をつくるSI

従来型地縁組織の衰退と硬直化からの再生

NPO型地域組織による協力やその誕生：課題に応える新しい仕組みづくりとしてのSI

6-2 道普請、川普請の伝統と再生のソーシャル・イノベーション

地域がつくり、地域が利用し、地域が守る：市民が行動する

地域的公共性の領域の担い手としての市民：川や道を守る

守れない場合には、地域の市民社会による仕組みの再生へ：従来型公共、市場、社会部門（地縁団体）の衰退と硬直化

ボランティア活動やNPO型組織によるSIの誕生：市民社会的な観点から課題に応える新しい仕組みづくり活動づくり

目的達成のための協働へのSI：地域団体、NPO組織、企業（事業者）、行政の連携協力づくり

7 これからの市民活動とソーシャル・イノベーションの関係

市民とその活動はSIによってその目標を実現する

社会問題を解決し、持続可能な未来を実現する努力、そのための政策提案、他のセクターとの協働は、すべてSIを必要とする

市民とその社会の目標はすべての市民が等しく権利保障されること

個々の市民活動や市民社会組織のミッション：個別課題への実践から社会を変える：貧困、平等、教育、福祉、平和、地域と地球環境など問題は山積

SIによって目標を持つことができる市民と市民社会組織

SIを意識することで市民活動や市民社会組織の活動の活発化を促進

市民活動相互の連携の広がりを生むSI:協働を育む結び目としてのSI

8 ソーシャル・イノベーションが変える市民と市民活動、そして市民社会の展望

SIがもたらす市民的な意義はどこにあるのか

1. 市民とその社会の共通の目的、基本的な価値観の共有のためのツールとして
2. 地域（京都、関西）、日本、世界の多様な市民とその社会組織の連携のツールとして
3. 一人一人の小さな思いを大切に共に生きる活動を考える共通の基準として
4. 企業や国地方の政治行政との協働による問題解決のツールとして
5. 様々な市民の声を丁寧にすべての市民に、経済に、政治に伝えていく政策提言の手掛かりとして

おわりに

市民と市民社会、その活動に変革と展望をもたらすソーシャル・イノベーションに期待しています。